



白子保年間時代の物
珍本 大村伯島財家拂下
既和士年二月十日所展文一付ヨリ
人カ譲アリタリ

榮りやいふ事と一回一葉の景を

夕とあはれあはれ秋の

猿衣より入風の吹き渡る

暮るく廣に和音の友さ



木多よほひし松の之腸さけく

玄覽

民の室電よかきしを解糖

物凍くびつ海系おれ目のお

波乃び多きく水きの群

枯蓮の室のたう累の赤の

覽

着巾し麻凡の肉をりのり

花戸し草花とけの時を

生白

情もさあめ罌よま

人

月一荷のさそく 三行月

ら紙りおれみの書 神

人
ききぬいおれのはのちりき

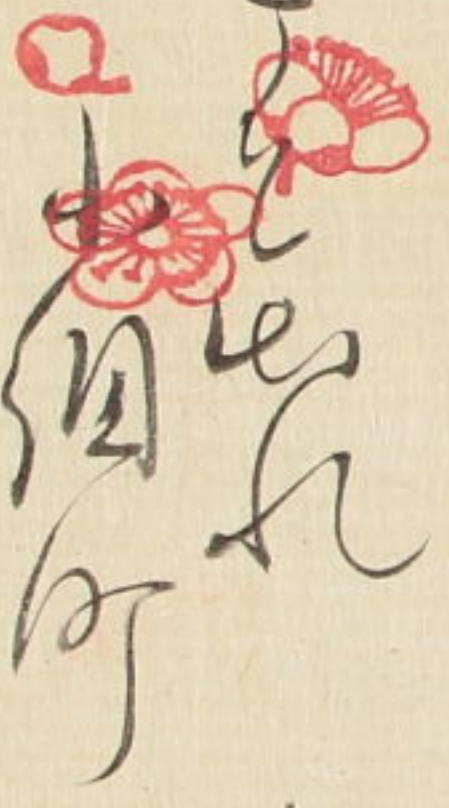
場
ききぬいおれのはのちりき

松
松屋のちりき 三行月 覧



垣
垣もあつたはりき 西

名
名もあつたはりき 細所



鳴階

川
川もあつたはりき 心

片らぬのいふまゝに強る月のら

生

河を柱と媚顔くれそわ

深川の男らも女節を

振竹を便りを思ひ粒風

人
到もさうに秋も食ひぬをこの

埃より舞をの幸

舞動は此の節衣をたれ
愛

生

海もさよとせぬ貝の申す
覽



薩摩の経海聖教の漢の文



階

東山集の序

九万里の遊風博游乃比

之流よりいふ學の平角

尾野安甲斐の巻も紙前の縁

階

清州の流さそ流るる事

二十の月よ却るる事

覽

初有 何れも 今も 木の 枝

季い

秋月のあまなりし 山籠り

河津ふらふ 花に下地 覽

若くはよ みるは 草掃除



生

命を海きぬき 關帝

かたの年 鏡河の 風温成 蒼蒼 覽



蒼蒼 局の 糸女ささ

折物と 建ふ 奴と 膝と 紅



階

赤く 紅く くる 是 對 名

世の中はあまの鴨乃見谷の
生



鯛のどほく髪を主乃を
覽



凡黄昏

神垣よおのこふ乃伊は連羅
啗

初を乃新も清紀大趣

月初よおのやおんこつ能
生

あたらし傳る高の山梳

とろく

色給ぬねる古今の申の丁
疑白

人よふ下の節をこの伝

人
心のよきをの詞多し

かきりいりぬたの足襪

百人一首集子の湯たきを 覽



甲黄昏

難波のちんハ伊勢てゆきや

白

業乳根といふ産瘠のたき



かあは

鼻を吹くも其衆人の柱

傾城まもる物ゆめゆめは

生

堯林はもと南隣一汗

人
博字んせいの智恵と縁ん

蛸色をくはるぬり
覽



ふきくまきなるふれ月

斬り梅さく入梅の巾着
覽

二二

襦袢の縫上り
二階窓
生

さやうもいふを中

初着
覽

驛使春
帶
豔
帯
見

名氏留
細見

他道より来るも此端の月さく



階

一筆より書りたる意概乃葱

まゝとて松原のあふくはる



階

まゝの部々々々々々々々々々

鏡湖の松原の水遠 覽



鏡湖の松原の水遠 覽



年々流れる水の色や鼻

神と流るる星乃代家戸



階

生

白

里の原をえより

ふけぬの子

生

為氷と春心
 祖の川

階

淡久乃海と文わら少原

佃水巻 列車の如紙

玉潤と亀 暢流 流即成

積石と舟 蛤の壳

白

書ハ 濱の海
 杖溪子路業

覽

千里の糧ハ 舟津松本

人
月邊の井の跡の字わねと

人
端中角を記懐中の蠟

驛使春茶

萱床見

白
向ふよりうらみかきし月さぬ

白 生

人
よしの影心長續けの疆

人
寛永の圖取れより穿す城 覽



人
地を度痛の福乃刈株

人
桐花の月を華さる旅



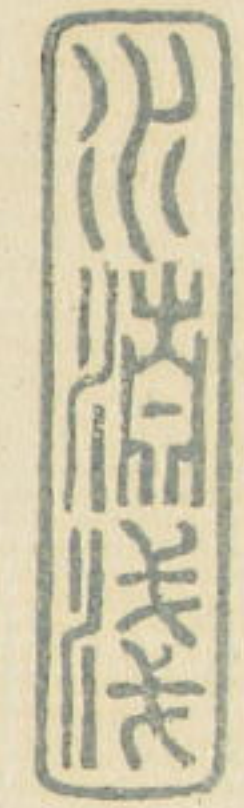
白

人
新白をさくく少物の心

あめりし穿のるまて
御印
あめりし



寅の七つと
王
乃氏



白 階

法原武者今も神本
乃氏

あせくをくぬ
おき
乃氏

白糸の古紙の分の
乃氏

從ゆるわね
乃氏

瓦の香え
乃氏

白

たのふ
乃氏



定永圖

仙郎夢斷月應知

今乃

取

玄覽



以經



汲深井

鳴鴈



各二十五句吟

玄覽

二百三十五句

鳴喑

百十二句

生白

百九句

凝白

九十五句

陽月十三日滌除軒席上

同十七日於閣中趣開卷

